



小林研一郎 記念音楽会余話

小林研一郎ハンガリー・デビュー三十周年記念音楽会が、十月五日、ハンガリー科学アカデミー大ホールで盛大に開かれた。今回も普段のクラシック音楽会では楽しめないようなプログラムを構成した。このヒントは十年前に遡る。

一九九四年三月。開業して間もないケンピンスキー・ホテルで、小林研一郎ハンガリーデビュー二十周年音楽会を開いた。当時、日本人理事会にこのお祝いの会の主催を語ったが、二時間議論しても埒が明かないので、時間の無駄と私が一人で組織することに。幸い、国立フィルからは演奏者の出演と裏方の準備の全面支援を得、ケンピンスキー・ホテルの支配人からは会場費を無料にするという特別な計らいをいただき、さらに大使館からも後援をいただいて、開催にこぎ着けた。しかし、三百名近い参加者に十分な飲食を提供する予算はなかった。もともと、参加者の半分は国立フィルと国立合唱団のメンバーだったから、もてなす必要もなかったが、TVクルーが要求する飲食も出せず、早稲田グリーメンバーには食事なしで四時間も壁際に立たせることになってしまった。

この音楽会は午後七時から十一時半まで、長時間の熱気に包まれた。国立

フィルのメンバーが代わる代わる舞台に立ち、軽やかな演奏を披露してくれた。プログラムは二部制で、前半が国立フィルと国立合唱団、後半は小林ファミリーのプログラムという構成にした。加藤弘之、小林亜矢乃の両ピアノと早稲田大学グリークラブの演奏が第二部を飾り、マエストロはカンツォーネを歌われた。そして、最後は、国立フィルと早稲田グリークラブをバックに、マエストロ小林が「アカシアの径」を歌ってお開きとなった。この模様は、ドゥーナTVの五十分番組として、繰り返し放映された。

今度はどうしても商工会の主催を取り付けたかった。それは予算の問題というより、当地の日本人社会の見識の問題だからだ。今の商工会が出せる金額は高々五十万Ft。音楽会を主催するのは良いから、とにかく主催することで、自らの見識を示すことが肝要だと考えた。大使館についても、相応の後援をお願いした。小林研一郎がハンガリーにおける日本人のステイタスや評判を高めた貢献を考えたら、当地の日本人会にとっても大使館にとっても、この程度のお祝い行事は最低限の儀礼のうちに入る。小林の存在でハンガリーにおける日本人の印象がどれほど良

もらうという手順にした。

ームスのレクイエムが用意された。コチシユがマエストロに敬意を表して演奏してくれたのが嬉しかった。天才少年も大人になったということか。演奏したい人がたくさんいるので、希望者を募れば切りがない。音楽会が長くないようにと、国立フィル・合唱団はこの二本で終わらうということにした。

問題は小林プログラムの構成。加藤君も亜矢乃さんも来られないので、二〇〇一年飯塚国際優勝の関野直樹君にピアニストを代表してもらった。ハンガリーのコンテストを総なめにしている2世少年、金子三勇士君にも演奏してもらおう予定だったが、腱鞘炎で取りやめになった。その代わり、日本人とハンガリー人の弦楽四重奏団(Maja)に、日本歌謡の演奏をお願いした。

音楽会の前夜、日本人音楽家たちが我が家に集まり、第二部のプログラム構成を確認しながら、マエストロの前で全員が演奏して、レッスンを受けた。最終的な順番は会場リハーサルまで決まらなかったが、「アカシアの径」を小林の返礼とすることはマエストロも納得された。実は、マエストロの意向を聞く前に、ラジオ児童合唱団との打ち合わせで、日本人学校校歌だけでなく、「アカシアの径」は練習済みだった。二度にわたって、私がマエストロの役をやり、児童合唱団とコーラス練習をした。「これが実際に歌われるかどうかは当日にならないと分からないが、とにかく練習して欲しい」と合唱団にお願いした。

開演直前になって加わった変更が三つ。一つは、校歌の後に、マエストロが十四歳の時に作曲した「藤棚の下に」を坂井圭子さんが歌う。二つは、校歌のピアノ伴奏部を躍動的なものに換える。三つは、「アカシアの径」を半音下げる。急いでピアノ伴奏部を切り貼りしながら、伴奏楽譜を用意することになった。坂井さんは風邪気味で声が出ない最悪の条件で、開演一時間前にマエストロが小さな紙に走り書きした楽譜をもらい、二〜三度練習しただけ

で、本番に臨むことになった。

「アカシアの径」の後は、マエストロのピアノとMajaの静かな演奏終わるという筋書きが立てられたのは前日の深夜だったが、その出番を最終確定したのは開演直前だった。

キシユ・レーカさんに司会を頼んだのも正解だった。彼女の通訳は歯切れが良い。通訳にありがちな無駄な説明がない。これはプロフェッショナルの条件だ。通訳が余計な説明をすると、訳が無用に長くなり、話のリズムが壊れる。この点、彼女の通訳はテンポが良い。また、彼女は相手の気持ちを最大限にくみ取って表現しようとする。だから、心がこもっている。場が華やか。このような資質を備えている通訳は希有だろう。テレビの司会者のような役割を果たしてくれるだろうと考えた。プログラムの進行手順を前日に渡し、音楽会のイメージを頭に入れてもらい、必要な準備をもらった。

音楽会の二日前、十月三日、国際マラソン大会で五つのリレー・チームを編成し、私自身も十二・六kmを走つてさすがに疲労が蓄積していた。リハーサルが終わり、トイレの鏡の前に立った。白目の毛細血管が切れ、白目半分が真っ赤に染まっているのに気づいた。会が終わって、肩の力が抜け、音

くなっているか。こうした機会にマエストロに感謝の意を表し、当地の日本人や商工会のプレゼンスの高揚に、さらにマエストロ小林を利用させていたかどうかというのが、国際的な常識というものではないか。日本人が番組「ミツコ」でTV2に抗議をしてもほとんど無視されるが、小林が発言すればその影響は計り知れない。そういうスパー・スターを持っているメリットを、当地の日本人はほとんど生かし切れていないのだ。

三十周年の今回は最初からホテルを諦めた。ホテルの会場を借りるだけで五十万円はする。それなら国立フィルに安い会場を借りてもらい、予算を有効に使おうということで、ハンガリー科学アカデミーに決めた。もともと、数年前に大改装したアカデミー付属のレストランは安くない。大使館主催のカクテル、国立フィル主催の内輪のレセプションはそれなりにコストがかかっている。ソフィア・ローレンの息子の結婚披露宴に使われたこともあって、レストラン側は非常に強きになっている。この交渉は大使館と国立フィルにお任せした。

プログラム構成だが、国立フィルからは弦楽四重奏とコチシユのピアノ協奏曲、国立合唱団からは小編成でプ

楽会に駆けつけた多くの知人・友人達に挨拶するのにも忘れてしまった。快い疲労感と充実感に浸った夜だった。

もともと、これには後日談があった。忙しいキシユ・レーカさんに司会をお願いした代わりに、彼女が引き受けた資料の翻訳(ジュールチャーニー訪日資料)をお手伝いしようということになった。ところが、実際に資料や下請けに出した訳文をもらってみると、そのままでは使えない。ほとんど小冊子全部の翻訳と編集校正をおこなう羽目になった。これで三十時間近い時間を費やした。翌月曜日の明け方にこの仕事を終えて、漸く、合唱団との練習、マラソン・リレー、リハーサル、音楽会翻訳と続いた一連の行事が終わった。(二〇〇四年十月十四日 盛田常夫)

